

・考察 - 韓国のボランティア活動の課題と韓国人のボランティア意識

1. 韓国のボランティア活動における問題点と課題

1) 中高生ボランティア活動 - ボランティア活動制度化に伴う点を中心に

本節では、まずこれまでの内容の整理をし、次に第 4 章で紹介した二つの例に見られる中高生ボランティアの特徴と問題点について述べる。そして、その解決方法を探っていく。

韓国における中高生のボランティア活動は、5.31 教育改革が行われるまではほとんど行われていなかった。統計庁のデータによると、1991 年に中高生のボランティア参加率は 3.7% と、全世代の中で最低だった。しかし改革以降の 99 年には 33.8% へと急増した。ボランティア制度化を契機として、中高生ボランティア活動は活性化へと大きな転機を迎えた。また改革に伴い、政府支援や民間団体によるボランティアセンター等も全国的に整備された。しかし、ボランティア団体等に参加している中高生は全体の 4% と少ない。よって、ボランティア関連機関は中高生に身近に感じてもらえる工夫をすることや、広報を積極的に行うことが必要である。

このような中、中高生ボランティアは主に「福祉関連施設」(45.3%)、「地域の環境保全」(42.4%) の分野で、「受け入れ機関・施設の業務手伝い」(37.3%) や「地域の環境美化や行事支援」(21.7%) を行っている。しかし実際には単純作業やゴミ拾いが多いという報告もある。また活動は長期休暇中にする場合が多く、日常的・定期的には行われていない。

本調査によると、ボランティア活動について、中高生の 4 割は「余裕のある人だけに任せておけばよい」あるいは「意欲のある人だけに任せておけばよい」と答え、活動に対する消極的な姿勢を見せた。しかし、5.31 教育改革をきっかけにボランティア活動への「関心が高まった」と 6 割以上が答え、実際の活動についても、「自分が人間として成長できた」また「困っている人の役に立てた」等という点に関して、特に満足しているようである。今後の活動への参加意欲も 95% 以上があり、その理由としては「学校等で機会がある」からが最も多く、また 4 分の 1 の人は「自発的な意思で」と答えた。活動を希望する分野としては「社会福祉」の人气が高く、身近に適当なボランティア団体がないことが活動への参加を妨げていると考えている。

では次に、第 3 章で紹介した〈筆者が見た中高生ボランティア活動の現場〉の例 1 に見られる中高生ボランティアの特徴と問題点について述べる。

例 1 に関しては、活動に関わったボランティア受け入れ施設の職員と中学生ボランティア、そして施設の子どもの立場から見える問題点を挙げたい。筆者はこの場面に偶然いただけであるが、様々な活動現場を見た中で最も端的に中高生ボランティアの姿を捉えていると感じ、本稿で取り上げることにした。この現場で最も印象に残っていることは、受け入れ施設職員の形式的で、冷たい態度である。施設側は、ボランティア活動制度化以降、近隣の中学校の生徒が頻繁に訪れるようになったが、それ以前から大学生のボランティアサークルや、教会の社会奉仕グループが訪問していたため、特に中学生にやってもらう活動はないと考えているようである。中学生ボランティアが来ても、形式的に扱い、活動をしたという証拠の印が必要なだけだと考えているようであった。また中学生の立場からすれば、ボランティアに特に興味もないが、進学に影響するため、仕方がないと考えているような態度であった。そして施設の子ども達は中学生が来て、自分達が食べた後の食器を洗っていること自体に気付かず、交流もなかった。

この例から、中学生に関わる全ての立場の人がボランティアに対する理解が足りないのではないかと考える。また、中学生が主体的に取り組める環境が整っていない点も問題として挙げられるだろう。この点に関しては、例 1 について述べた後で、考えてみたい。

では例 2 に関しても施設側と高校生ボランティアの両者の立場から考えてみたい。例 2 は 例 1 とは違い、高校生のボランティア活動の成功例である。なぜなら、高校生は自分が興味ある分野の活動のため楽しく、受け入れ施設の職員や子ども達とも交流できるからである。また施設側は、図書室を管理する人手がないため、高校生の自主的な活動にはありがたいようであった。このように、両者の需要と供給が一致し、普段の生活では出会わないような人々と出会うことができ、地域の福祉サービスの一つに責任感を持って取り組めた点が成功の理由であろう。

それでは、上記で述べたボランティア活動の制度化に関わる様々な問題点はなぜ生じたのか。これらは、すべてが行政の主導の下で進められたことによる負の副作用と言えるだろう。なぜなら中高生たちは一方的に受け手の立場に置かれるからである。

またボランティア活動が受験に反映するよう義務付けた点も、活動がしなければならぬものとして与えられてしまう所以であろう。活動に対する中高生の消極的な態度はそのためであると考えられる。教育部は、ボランティア制度化を導入した背景について、青少年の人間性と共同体意識の育成という二点しか提示しておらず、ボランティア活動によって、なぜ青少年の人間性と共同体意識が育成されるのかは十分に説明されていない。

筆者は、ボランティア制度化を全面的には批判しない。むしろ中高生たちにボランティア活動をする機会が設けられたことは重要であると考え。活動を通じて、地域社会には多様な人々が住み、様々な問題があることを気付かせるきっかけを与えるとこの点において、言い換えれば、一人ひとりが社会を構成する主体であり社会に参画できることを体感できる点において、この制度の導入を評価したい。実際に、消極的な態度で取り組んだ活動を通じて、中高生が何かを得、活動にも満足している姿が見られることは述べてきた通りだ。さらに、ボランティア活動の教育効果をまとめると、

自分と違う価値観、知らなかった生き方があることに気付くこと、自分自身を見つめ、自分の大切さに気付くとともに他の人の大切さ（命の大切さ、人権）にも気付くこと、自分を表現し、意見を交わし、共感し、違いを認め合う社会的技量を磨くこと、社会の様々な課題に気付き、自らの関わりを模索すること、と言える¹。このようにボランティア活動は、中高生たちにとって貴重な学びの場を提供することができる。

以上のことから、例に見られるような中高生を少なくするためには、まず中高生が主体的に意欲を持って取り組める活動や学習を、質的・量的に豊かにする必要がある。そしてボランティア関連機関は幅広い関係者と共に、中高生が活動に参加できる機会をさらに充実させることが求められている。今後は政府支援のボランティアセンターだけではまかない切れないのではないかと。よって、地域のボランティアグループ等とも連携する必要があるだろう。加えて、中高生自身が活動の意味を考え、企画に参画して取り組めること、一人ひとりの関心や学びの過程に応じられるような多様なプログラムを創り出していくこと、それを支援する大人達の関わりが何より大切である。筆者は、受け入れ側・学校・ボランティア仲介団体などにおけるボランティアコーディネーター²を養成していくことが急務であると考えている。また多彩なメニュー

を用意することで可能な限り強制色を取り除くことが、今後求められていることではないだろうか。進学や就職のためだけの活動ではもったいない。

とにかく、中高生ボランティア活動はまだ始まったばかりだ。生じた問題を一つずつ克服し、韓国において中高生ボランティア活動が今後さらに活性化することを願いたい。

2) 大学生ボランティア活動 - 大学におけるボランティア活動活性化に向けて

本節では、大学生ボランティアについてこれまでの内容を整理し、問題点を明らかにし、その解決方法を探っていきたい。

韓国では大学生によるボランティア活動は、教育改革が行われる前から活発に行われてきた。江南大学社会事業学科が1979年に「ボランティア論」という科目を設置したことを契機に、他大学でも設置するところが増え、現在では大学におけるボランティア関連科目の約3割が必修科目となっているほどである。

韓国の大学生のボランティア活動への参加の意向は、他世代に比べ高く、76.9%である。しかし最近1年間におけるボランティア参加率は19.6%で、活動期間も7割が「1年未満」と長続きしていない。つまり参加はしたいという気持ちはあるが行動には移さず、参加したとしても持続しないようである。特に注目すべき点は、大学生の8割以上が「ボランティア関連業務を行っている場所を知らない」と言うことである。ボランティア参加者は35%が社会福祉分野で活動しており、活動に参加するきっかけは「教会、サークル、学校で参加する機会があって」54%、または「友人の勧誘」20%である。

次に、本調査の結果について整理したい。

まず言えることは、韓国の大学生は社会貢献に意欲的であるということである。9割が「社会の役に立ちたい」と考え、活動に参加するきっかけとなるものについて「貧しい人を支援すべきという気持ち(100%)」や「利益の社会への還元(89.6%)」への回答率が高い。そして「社会のために役に立てた(85.4%)」上、「自分自身も楽しめた(79.2%)」と満足しているようである。今後の活動にも「ぜひ参加したい」と強い意思を見せる大学生が2割を超え、残りの全ての大学生も「機会があれば参加したい」と答えた。その理由は約65%が「自発的な意思」であり、特に「地

域社会に参加したくなって(29%)」という気持ち強い影響を与えている。また自分なりに活動への意義を見出して参加している大学生も多いようだ。活動分野は、従来から大学生が取り組んできた「社会福祉」関連の活動に加え、「国際交流(協力)」分野への人気最近、高まってきており、活動は日常的に行うより、期間を限って短期間で行うことを希望しているようである。しかし、活動時間がないことに加え、ボランティアに関する情報が少ないことも活動への参加を妨げる要因となっている。また現在、所属しているボランティア団体・サークルについて述べてもらった結果、各大学で様々なボランティアサークルが存在し、社会福祉関係を中心に活発に活動していることが分かった。

以上から明らかになる大学生ボランティア活動における問題点は、大学生は日常生活においては忙しいため、定期的な活動に参加できないこと、また社会への貢献に意欲的であるがゆえに、活動の中で自分の技術や能力を十分に生かせないことに不満を感じる学生が多いこと等である。これらの問題を解決するには、現在活発に行われている大学生によるボランティアサークルの活動を大学が支援し、学生に負担をかけずに、知識や能力を十分に生かせる社会貢献活動を推進することが必要であると考えている。また各種のボランティア団体及び受け入れ施設と大学の協力・連携により、大学生に向けた多様なボランティアプログラムを提供することもできるのではないだろうか。

2. 先行研究及び本調査に見られる韓国人のボランティア意識とその特徴

本節では、まずボランティア意識に関わる先行研究及び本調査の内容を整理し、そこから浮かびあがってくる韓国人のボランティア意識を少しでも明らかにしたい。

ボランティアに対するイメージに見られる韓国の特徴は、「農村奉仕活動(韓国では「農活」と呼ばれている)」という人手が足りない農繁期に作業を手伝う農業ボランティアや、韓国の人々にボランティアが知れ渡る契機となった「オリンピックボランティア」が挙げられていることである。しかし、これらより、さらに多くの人々がイメージするのは障害者や高齢者を助けることなど「人助け」というイメージである。そして現実にも過半数の人が「人助け」の活動に参加している。「ボランティア活動には、人助けや奉仕のように相手に何かを与えるという側面だけではなく、その活動から自

分が受け取るものがある。なぜなら、人と人の関係は常に双方向だからである³、また「ボランティアは犠牲とか奉仕と言う言葉に込められているような特別の精神を持った人がやるものではない。⁴」という文句に日本人である筆者は納得するが、韓国ではこれとは少し違った考え方で捉えられているようである。それは、1978年に‘volunteer activities’が「自願奉仕活動」と決められてから、現在までその名称が変わっていないということからも推測できるのではないかと。すなわち韓国におけるボランティア活動とは「自ら願って(=自発的に)誰かに奉仕をすること」であり、ボランティア21(1999)の調査でも明らかにされているように、「持つ者が持たざる者に(35.8%)」行う活動のことを指すのではないかと思う。ただ、この表現は誤解を招きかねないので、説明を加えると「少しでも多く持っている人が、少しでも足りない人に与えることは当然である」という意味を含んでいるようだ。つまり本来助ける義務のない人、社会的に直接的に関係のない人でも困っていれば助けるのは当然という意識があるのではないかと推測できる。韓国におけるボランティア活動の分野は社会福祉が中心であることから、「福祉」と「ボランティア」が同義語に解釈されているとも捉えられる。

また、聞き取り調査において「右手のやることは、左手は知らない」という格言を持ち出し、ボランティア活動を語る人にたびたび出会った。これは自分が行っているボランティア活動を他人には語らず、隠しておくということを表したものであるが、なぜこのような表現を好むのだろうか。筆者はこうした表現に違和感を覚えたが、その理由は、ボランティアは特に隠すべきものではないと筆者は考えていたからである。韓国においては小さな善意は隠すべきものと考えられているのだろうか。「天使を探せ!」というテレビ番組があるほどである(この番組の内容は、貧しい人々を一人で懸命に援助・支援している人を探し出し、その人が一番欲しいものをプレゼントするというものである)。

次に本調査に見られるボランティア意識の特徴について、前節と重なる部分もあるが、整理して述べていきたい。

韓国の中高生の8割、大学生の9割が「社会の役に立ちたい」と考え、ボランティアの経験有無に関わらず、「可能な限り多くの人がボランティア活動に参加すべき」であると考えた人が最も多い。特に、ボランティア経験のある人の約15%は「みんな積極的に参加すべき」であると考えていることから、経験者はボランティア活動に何ら

かの意義ややりがいを見つけていることが分かる。そして、そのような活動は「社会の役に立ち」、「自分が満足する」ことが大切であると考えており、日本人が考えるような「他人から強制されたくない」、「気軽にしたい」という捉え方とは違っている。困っている人・貧しい人を助ける活動に気軽に参加することに批判的な考えを持つ韓国人の姿をかいま見ることができる。韓国では、ボランティア活動の特徴のひとつである「公共性」に特に重きを置いているようだ。「ボランティアにおける公共性とは、何らかの意味で社会的弱者に対して手を差し伸べること⁵」である。

以上に述べてきたことから明らかになる韓国人のボランティア意識とは、韓国におけるボランティアとは何であろうか。筆者は精一杯の探求を続けたが、これが答えだと言えるものは、見つけられなかった。しかし、いくつかの特徴は明らかになったと思う。それは、韓国において「ボランティア」と言う時、「福祉」とほぼ同じ意味を持つのではないかという点、ほとんどの韓国人の人々は社会の役に立ちたいという気持ちを持っているが、行動に移している人は少ないという点、しかし、ボランティア活動に参加している人は活動を楽しみ、そこにやりがいを見つけているという点、最後にボランティア活動は善行であると捉えられているのではないかという点である。

(注)

¹ 「広がれボランティアの輪」連絡協議会(2001):「市民の力で共生の世紀を創り出すために提言」

² ボランティアコーディネーターとは、ボランティア活動のコーディネートをする、あらゆる組織の有償スタッフを指す。個人の自発性、意思を尊重し、共感を引き出し、それを社会の課題に結び付け、やがては市民社会の構築につながっていくボランティア活動を支援していくという目的・価値を持つ。(『ボランティア白書2001』より抜粋)

³ 前掲書

⁴ 前掲書

⁵ 前掲書